INTERVIEW
369人目
上

千人回峰

心に響く人生の匠たち

「千人回峰」というタイトルは、比叡山の峰々を千日かけて駆け巡り、悟りを開く天台宗の荒行「千日回峰」から拝借したものです。千人の方々とお会いして、その哲学・行動の深淵に触れたいと願い、この連載を続けています。

# 松武秀樹

*Hideki Matsutake*

音楽家




## 今回は何も起きませんように……
## 神に祈ってライブを続けたYMO時代

【東京都渋谷区発】1978年の結成から83年の散開まで、わずか5年の活動期間で日本の、いや世界の音楽シーンに絶大な影響を及ぼした伝説のバンド、イエロー・マジック・オーケストラ（YMO）。メンバーはベースの細野晴臣さん、ドラムスの高橋幸宏さん（2023年没）、キーボードの坂本龍一さん（23年没）の3人。しかしもう1人、極めて重要で欠かせない人物がいた。それが松武秀樹さんだ。レコーディングだけでなく、世界各国で開かれたライブにも帯同、シンセサイザーとコンピューターを駆使するテクノポップの屋台骨を支え続けた。（本紙主幹・奥田芳恵）

### 「明日から参加できますか」に応じてYMOの“第4の男”が生まれた

**奥田**　YMOの“第4の男”と伺いましたが……？

**松武**　坂本（龍一）さんが言い出したんです。自分からそう言ったことは一度もないんですが、4番目の奴は人間にできないことをやってると。

**奥田**　どんないきさつでYMOに？

**松武**　細野（晴臣）さんに誘われまして。日本から世界に発信する新しいアルバムをプロデュースするということで、いろいろ試行錯誤していたようなんですが、生演奏では「何か違う」と。そこで全部シンセサイザーでやろうということになったんですね。ところが機械に音を入れていく、いわゆる「打ち込み」ができるやつがいない。坂本さんとは、彼が学生の頃からのつき合いでした。デビューアルバム『千のナイフ』で僕は、シンセサイザーのプログラマーとしても参加していたんです。ちょうどローランドの「MC-8」という、出たばかりの製品を入手して使い始めた頃でした。自動演奏をつかさどるシーケンサーですね。車が何台も買えるほど高価でした。



**PROFILE**　1951年、横浜生まれ。71年から作曲家、冨田勲のアシスタントとしてモーグ・シンセサイザーによる音楽制作を始める。78～82年、イエロー・マジック・オーケストラ（YMO）にシンセサイザープログラマーとして参加。81年、自身のユニット「ロジック・システム」を始動。16作のアルバムを国内外で発売。日本芸能実演家団体協議会常務理事、MPN顧問、ミュージックエアポート代表取締役。

構成・撮影／道越一郎
*text and photo by Ichiro Michikoshi*
2025.2.6／東京都渋谷区のヤマハサウンドクロッシング渋谷8階ラウンジにて



奥田　それで松武さんに白羽の矢が立ったんですね。

**松武**　自動演奏でアルバムをつくりたい、という細野さんに、スタジオに来てもらって一通り説明したんです。すると翌日か翌々日にマネージャーさんから電話があって、「明日からレコーディングに参加できませんか？」と。

奥田　それはまた急な話で。

**松武**　明日は仕事があって、と話すと、「夜ですから」とのこと。なら大丈夫ですと、夜から参加したら、いきなり翌朝までレコーディングです（笑）。最初の曲はマーティン・デニーの『ファイアー・クラッカー』のカバーでした。世界で400万枚売るんだと語っていました。

奥田　初っ端から徹夜仕事とは……。シンセサイザーでの音づくりってそんなに大変だったんですか。

**松武**　70年代の話ですから、やってみないと分からない世界です。そもそも音色が記憶できない。イメージする音ができたらその場で録音するしかありません。しかも、一つの音を録音するのに丸1日とかざらでした。今なら怒られちゃいますが「湯水のように」スタジオを使っていました。今みたいに、波形から何から全部覚えられるような時代じゃなかったので、とにかく時間がかかったんです。

奥田　音色が記憶できないとなると、ライブの時はどうされていたのですか？　YMOの一員として世界中を飛び回っていらしたはずですが。

**松武**　「オリジナルの曲はいったん忘れていただく」という考え方でライブをやっていました。よく言えば、俺たちは新たな演奏に挑戦している、ということです。同じ音がつくれないからなんですけどね。テンポですら毎回違うんですよ。

## EXPO’70の帰りに出会った「シンセサイザーのバッハ」の衝撃

奥田　ライブは一発勝負なわけですから、失敗も結構あったんじゃないですか？

**松武**　それはもう（笑）。特に、ニューヨークのボトムラインというライブハウスで『ビハインド・ザ・マスク』を演奏した時は最悪でした。あらかじめシーケンサーに楽譜を全部打ち込み仕込んでおくわけです。ボタンを押して演奏をスタートします。ところがその日は、ステージに上がって、さあ演奏スタートとなってスタートボタンを押したら、最初の部分の演奏データが一気に吐き出されちゃったんです。

奥田　超高速で冒頭の演奏が全部終わってしまった。

### ヤマハのシンセサイザー「CS-80」



シンセサイザーの黎明期、1978年発売の記念碑的製品。単音しか出せないのが常識だった当時、同時に3音出せるようにしたのが最大の特徴だ。シリーズの最高機種で、重さは82kgと、大人二人でやっと持ち上がる超重量級。松武さんはこのCSシリーズから、ヤマハとの関わりが深まったという。

**松武**　お客さんは大いに沸いたんですよ（笑）。新曲とでも思われたのかも知れませんね。確かに、ちょっとカッコよかったんです。

奥田　とはいえ、ステージ上のメンバーは呆然でしょう。

**松武**　その時は矢野（顕子）さんも参加していらしたんですが、ドラムスの（高橋）幸宏さんに、お客さんからは見えないように目配せして、何事もなかったように演奏を始めて、みんなでやり切りました。平然と（笑）。

奥田　バックアップのシステムとかは用意しなかったんですか。

**松武**　映像も同期させるような、今時のライブなら3台4台と用意するものです。（当時は）頼むから今日は何も起こらないでくれと、祈りながらやっていました。それから、失敗しても決して舌を出したりしてはいけない。ロボットみたいに無機質な態度でいなきゃいけない、ということも学びましたね（笑）。

奥田　坂本さんとは古いおつき合いなんですね。

**松武**　彼は学生時代からいろいろなバンドに参加していて、女性シンガーソングライター、りりのバックバンドでもキーボードを弾いていたんです。当時の渋谷公会堂、今のLINE CUBE SHIBUYAで、開演を知らせるブザーの「ブー」という音がなんとも無粋だと。鐘の音みたいなものに変えられないかと相談に来たんです。

奥田　確かに今でもブザー音のホールはありますね。いつからか次第におしゃれな音のホールが増え始めたように思います。そんなことがあったんですね。

**松武**　坂本さんは東京芸術大学だったので、シンセサイザーはバリバリ使っていたんですが、音の組み合わせとか、新しい音をつくるというのは難しかったらしくて。それで、一緒に鐘の音をつくったのが最初でした。

奥田　最初といえば、シンセサイザーと初めて出会ったのは？

**松武**　「月の石」を一目見たくて、70年の大阪万博（EXPO’70）に友人と行ったんです。その帰りに寄ったレコード店で流れていたのが『スイッチト・オン・バッハ』でした。ウェンディ・カルロス（当時はウォルター・カルロス）という人の最初のアルバムなんですが、バッハの楽曲をすべてシンセサイザーで演奏するという、当時としては画期的な作品でした。

奥田　聴いたこともないような音だった、と。

**松武**　店頭でジャケットを見せてもらったんですが、バッハに扮した男性の後ろに、電線だらけの大きな箱が写っていたんです。それが楽器だと教わりました。とはいえ、なんでこの箱からこんな音が出るんだと。どうしても知りたくなって、渋谷の道玄坂にあったヤマハに聞きに行ったんです。そうしたら、それはシンセサイザーという楽器だと。それで初めて知りました。

奥田　当時、シンセサイザーの第一人者といえば冨田勲さんだったわけですよね。松武さんは冨田さんと深い関係がおありだとか。

**松武**　ミュージシャンをやっていた父のつてで、ご縁があって冨田先生の事務所に就職することになったんです。　（つづく）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です




「ものづくりの環」の詩

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人――
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN
http://www.bcn.co.jp/

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰（対談連載）」で公開中です。
https://www.bcnretail.com/hitoarite/